

戦時下の暮らし

(せんじかのくらし)



昭和 13 年興風会館で
漢口陥落を祝う町民
(茂木義資氏提供)

昭和 12 (1937) 年 7 月に北平 (現北京) 郊外で発生した軍事衝突事件 (盧溝橋事件、こうきょうじけん) をきっかけとして、日中両軍は事実上の全面戦争に突入しました (日中戦争)。この年 12 月、日本軍は中国の首都南京を攻略しましたが、中華民国政府は首都を武漢市漢口 (ぶかんしかんこう) 地区に移し、抵抗を続けました。翌 13 年 10 月、この漢口も陥落し、日本国中の人々がこれを祝いました。上の写真は興風会館集まって漢口陥落を祝う人々です。しかし、中国側は首都をさらに奥地に移して徹底抗戦の意志を示し、戦争は泥沼化の様相を呈してきました。

日中間の戦争の長期化が予想されるなか、政府は、国民の生活や精神の統制を強化し、生産の向上と戦争継続に必要な体制の組織化をはかりました。現野田市域においても昭和 12 年の 10 月には一週間にわたって国民精神総動員強調週間が実施され、翌 13 年 7 月の「日華事変一周年記念日」には、一戸一品献納、一菜主義等が喧伝されました。翌 14 年 4 月には、従来の消防組、防護団を発展的に解消した警防団が組織され、在郷軍人会、国防婦人会、青年団等とともに防空演習等の銃後の活動に大きな役割を果たすことになりました。企業の統合や統制も進み、同年の 9 月には千葉県醤油醸造組合が改組され、千葉県醤油工業組合 (理事・茂木佐平治) が結成されました。昭和 13 年 4 月の国家総動員法公布以降は市域でも各種報国会が組織され、昭和 16 年 4 月には千葉県産業報国会野田支部が結成されます。また、「隣保扶助 (りんぽふじょ)」の名目のもと、町内会、部落内、隣組の組織化も進みました。

同 16 年 12 月、日本はアメリカ、イギリス、オランダに宣戦を布告、ドイツ、イタリア等枢軸国側の一員として第 2 次大戦に参戦することになります (太平洋戦争、アジア・太平洋戦争)。しかし、戦局は悪化の一途を辿り、野田高女の学生や一般婦女からなる女子挺身隊が軍需工場での労働や食糧増産に動員され、さらには国民学校の生徒までもが食糧増産に従事することになります。そして、昭和 20 年 6 月には連合国軍の日本上陸に備えて、国民義勇隊 (隊長小林町長) = 一般男女市民による国民兵部隊が組織されました。

《詳しくは…》

* 野田市史編さん委員会編 『稿本野田市史年表・第 3 巻』 1972 野田市

昭和 18 年頃野田町駅付近での食糧増産勤労奉仕隊の作業 (キノエネ醬(株)提供)



出征する兵士 (待山栄次郎氏提供)

昭和 17 年後半になると米軍の反攻が開始され戦況は日本に不利に傾いて来た。十数名が同時に出征、在郷軍人会や多くの町民に送られて野田醤油(株)倉庫前を野田町駅に向かう。

